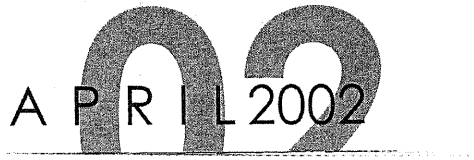


多摩大学チーム「プロジェクトK」NHKロボコン2002特別賞受賞

NHK大学ロボコン2002【富士山頂をめざせ!】のABUアジア太平洋ロボコン代表選考会が平成14年3月3日、代々木国立オリンピック記念青少年総合センター大体育室にて行われた。全国から選ばれた22チームのうち、多摩大学からは出原至道助教授のゼミを中心としたチーム「プロジェクトK」が最終選考会に出場しKONAMI特別賞を受賞した。

最終選考会は競技場の富士山の山並みに見立てた17個の円柱（スポット）にビーチボールを入れ、得点を競うトーナメント方式で行われた。シード権を得た2回戦第3試合、高知工科大学「ロボット倶楽部」と対戦した。多摩大学チームは前夜に立てた作戦通りの場所で富士山に見立てたマシンが見事に相手自動マシンの防御に成功し善戦したが試合終了30秒前、高知工科大学に逆転され3対4で惜敗した。しかし、富士山に見立てたアイディアが評価され見事KONAMI特別賞を受賞した。

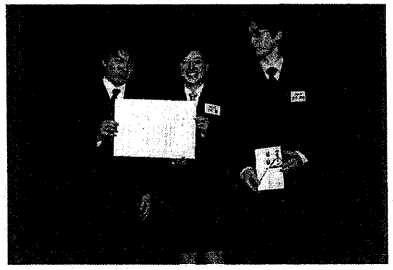
この模様は4月13日（土）午後4:00～5:30NHKデジタルハイビジョンで放送予定となっています。

特別賞に沸く「プロジェクトK」チーム

「ビジネスプランコンペ」で協賛企業賞受賞

3月9日川崎市で行われた「大学発ビジネスプラン・コンペかわさき2001」に多摩大学北矢行男ゼミから沖田麗さん、橋本典之君、福井直輝君が参加、協賛企業賞（ケイエスピー賞）を受賞した。出品したのは地元の多摩地域を活性化させるためのビジネスプラン「社会発展型会員制サンドウィッチ移動販売」の企業システム。学生のランチを利用して地域に分散している大学や学生と地域社会が、基金や会員制のシステムを通して自立しながらも協調しあう仕組みである。学園都市であることをふまえ、学生だからできること、学生自身のためになることの2つにポイントを置きながら、ソシオの概念に基づいた社会貢献型の企業像を描いた。

参加した沖田麗さんらは「今回のコンペを通して、社会に貢献するビジネスプランへの関心の高さを強く感じました。産業社会が変革期を迎える中で求められるのは、活力のある社会を実現するためのアイディアだと思います。それに応えるために頑張りたい」と語っている。



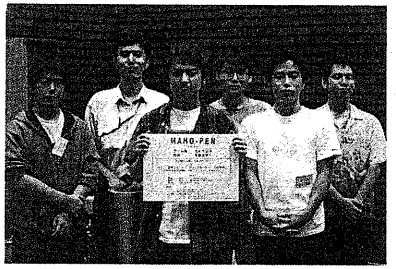
これからの抱負を語る北矢ゼミの３人

OCTOBER 2002

出原ゼミIVRC東京予選トップ通過

平成14年9月19日 東京台場で行われたIVRC 第10回バーチャルリアリティコンテスト東京予選大会で多摩大学出原ゼミ（チーム名モヒカンズ）がトップ通過を果たしました。

IVRCとは、Interaction and Virtual Reality Contestの略で、IVRC実行委員会(日本VR学会、岐阜県、各務原市、(財)イメージ情報科学研究所)により、1993年より開催されている、バーチャルリアリティをはじめとするインタラクティブな作品のコンテストです。

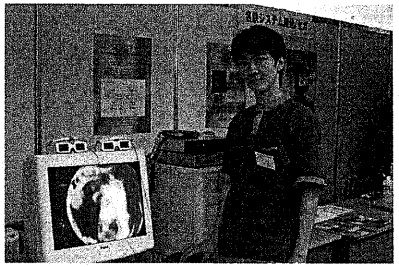


出原助教授（左から2番目）とゼミメンバー

多摩大学出原ゼミは３年連続本大会出場を果たすなど毎年好成績を残し、本年度も作品名「MAHO-PEN ～必修２単位～」チーム名「モヒカンズ」として作品出展しました。

「MAHO-PEN」は魔法使い専門学校の生徒であるプレイヤーが魔法のホウキと魔法のペンを駆使して360°のVR空間をホウキを使って動き回ることのできるアトラクションです。特徴的なのが独自のジェスチャー認識によってプレイヤーを操作できることで今までにないゲーム感が得られます。

東京大会トップ通過を果たした多摩大学「モヒカンズ」は11月29日、30日に岐阜本大会に出場して日本一を目指します。


3DVRミドルウェアのデモを展示している高橋君（４年生）

また、同会場で行われていた第7回日本バーチャルリアリティ学会大会ではセガブースで多摩大学４年生高橋誠史君（出原ゼミ）が3Dでのバーチャルリアリティプログラミングの開発が容易に行うことのできるミドルウェアの展示を行い、多くの注目を集めていました。

夏休みゼミ合宿行われる

今年の夏休みも各ゼミで合宿が行われました。

望月照彦ゼミではゼミ全体でプロジェクトを進めている栃木県足利市にあるココファームワイナリーで合宿を行い、地元起業家の人たちとのディスカッションなどが行われました。

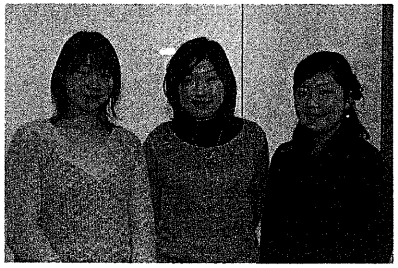
また、野田稔ゼミは河口湖 サニービレッジにて合宿を行いました。実際に企業の方を招いて話を聞いてこれからのゼミ活動の進め方などが話し合われました。

TOPIC

望月ゼミ全国ビューティフル・ビジネスコンペティションで入賞

AKINDO委員会（滋賀県主催）の全国ビューティフル・ビジネスコンペティションに多摩大学望月照彦ゼミのECOチーム（中瀬由貴さん・野崎奈由子さん・平野智子さん）が見事に入賞し、「AKINDOグローバル賞」を受賞しました。

100件近い全国の大学チームの応募の中からただ利益を求めるのではなく、社会貢献を主軸にした“ビューティフルビジネス”の視野からECOチームの地球の交流と平和を創造するスケールの大きなビジネスモデルに大きな賞賛が集まりました。審査委員長はソフト化経済センターの町田洋次氏、総合コーディネーターは大塚潤一氏（多摩大学大学院卒・実践女子大学）です。



左から中瀬さん、野崎さん、平野さん

入賞は4チーム、横浜国大、立命館大、白鴎大、そして多摩大学です。2月13日に國松滋賀県知事を迎えて、近江八幡市でプレゼンテーションと表彰式が行われます。

望月ゼミのホームページ：
http://www.edu.tama.ac.jp/semi/cocolomochi/

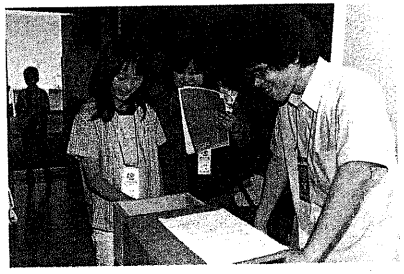
SEPTEMBER 2003

出原ゼミIVRC東京予選会 トップ通過!!

多摩大学の出原ゼミがチーム名「Tasmania」作品名「Dis-Tansu」で IVRC東京予選大会を1位で通過しました。

IVRCとは、Inter-collegiate Virtual Reality Contest の略で、IVRC実行委員会（日本VR学会、岐阜県、各務原市など）により、1993年より開催されている、バーチャルリアリティや，ロボットといった先端技術を用いたインタラクティブな作品のコンテストです。

今年の作品「Dis-Tansu」はタンスの引き出しを引くと中にいろいろな物体や水が出てくるという作品です。実際にはタンスの中に液晶ディスプレイを入れ、引き出しを引くのにあわせて画面の視点が変わり、本当に中に物体があるように見えます。また、タンスの出し入れを繰り返すと水に波が立ったり、恐竜の化石が崩れて行くなどインタラクティブ性も重視したクオリティの高い作品に仕上がっていました。



子供達に大人気だった「Dis-Tansu」

会場となったお台場日本科学未来館 では夏休みということもあり小学生の参加が多く、今まで見たこともないタンスの世界に夢中になっている子供達が多く見られました。一般投票も含めて出原ゼミチームは他の理工系大学チームに大差をつけて予選を突破しました。これで6年連続全国大会出場を決め、9月19日(金)、20日(土)の岐阜本大会に向けて最終調整を続けています。

出原ゼミホームページ：http://iis.edu.tama.ac.jp/

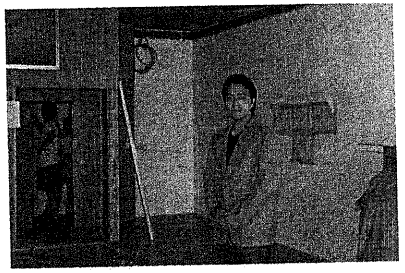
望月ゼミ発学生起業家誕生

「小学校の頃から会社を興す事を考えていました。中学校の時に多摩大学の事を知って面白い大学だなって思っていました。」と語る中田将来君（3年生）。今年9月からU.S.S.エンタープライズ株式会社の代表取締役社長として会社の運営を行う。

会社設立の経緯は所属ゼミの望月ゼミの課題「コミュニティビジネスを提案せよ」でコミュニティビジネスとブロードバンドを利用したビジネスプランが望月先生の目にとまり、既に自宅で立ち上げていたビジネスを他のゼミ生と共に株式会社として運営を始めた。

多摩大学から近い多摩市鶴牧の商店街に事務所を構えた。まだ工事中の事務所でビジネスプランについて語ってくれた。「望月ゼミで学んだこと、地域にどう貢献できるかをもとにビジネスを展開していきたい。しばらくはネットオークションを利用したリサイクルショップやパソコン教室を行います。他にもアイデアはありますが、これからゆっくり考えます。」

中田君の周りにも会社立ち上げの準備をしている多摩大生がいるという。多摩大学ゼミ発の会社がまだまだ誕生しそうである。



準備中の多摩市鶴牧の事務所にて

日（金曜日） 讀賣新聞 （第三種郵便物認可）

引き出しから波や恐竜骨格

仮想現実コンテスト 多摩大チーム3位に

全国の大学生らがバーチャルリアリティー（仮想現実）の技術を使った作品の出来を競う「第十一回学生対抗手作りバーチャルリアリティコンテスト」で、多摩大学（多摩市）のチームが、三位にあたる各務原市長賞に輝いた。来年五月にフランスで開かれる世界大会に招待されることも決まり、学生らは「さらにおもしろい作品に仕上げたい」と意気込んでいる。

大会は九月十九、二十の両日、岐阜県各務原市で開かれ、三十二チームの中から書類審査や予選を勝ち抜いた五チームが出場。六年連続出場の同大経営情報学部の出原至道助教授ゼミのチームは、タンスの引き出しを引くと、さまざまな疑似世界が現れる作品「Dis-Tansu」（ディスタンス）を出品した。

作品は高さ、幅とも約三十センチ、奥行き約三十六センチの木製タンスで、引き出しの中の液晶画面に映しだされる六種類のコンピューターグラフィックス（CG）映像が、引き出しを引く速度や、どの程度引き出したかなどによって変化する。

例えば、最初は岩石と白い棒のようなものが散乱しているだけの画像が、引き出しを前後に小刻みに動かすと恐竜の骨格に組みあがる。また、引き出されて光が当たる部分では走行するが、引き出されていない奥の部分では止まってしまうソーラーカーの映像もある。

来場者らに人気だったのは、引き出しの中で波を作れる映像。引き出しの位置を感知するセンサーを使うことで、少し引き出せば小さな波ができ、大きく引き出せば大きな波が現れるようにした。内蔵したモーターを使い、来場者が、波の動きを手応えとして感じられるような仕組みも取り入れ、目を引いたという。

制作にはゼミ生六人があたり、六月上旬から約三か月かけた。来年五月にフランスのラバルで開かれる「ラバルバーチャル2004」への招待も決まり、中心となった三年の高田泰生さん(23)は「今はまだ引き出しを引いてもらって初めて、おもしろいと感じてもらえるものだが、フランス大会までには、引き出しが勝手に動いたり、音がしたりと、来場者が思わず引いてみたくなるような工夫もしたい」と意気込む。

出原助教授は「今回は、手軽にバーチャルな世界を作れるシステムが評価されたのだろう。フランスでは世界中から集まる学生と交流し、まずは楽しんでもらいたい」と話していた。

作品を囲む出原助教授（左）と出原ゼミの学生ら

1 別刷り特集 第3種郵便物認可 朝日新聞 2003年(平成15年)10月12日 日曜日

考える力 行動する力

大学で何を学びたいのか、明確に自覚している人はどのくらいいるだろう。自分は何がしたいのか――。地域を実際に歩き、問題を見つけ、それを解決しながら自分のやりたいことを見つける。多摩大学（東京）で昨年から始まった「自己発見」の授業を見た。

多摩大「自己発見」の必修授業拝見

東京都狛江市の多摩川河川敷にバーベキューの煙がもくもくと立ちこめた。9月下旬、吉武匡平さん(19)ら多摩大学1年生のグループが韓国からの留学生6人を招いての集いだった。約30人が焼きそばや焼き肉をほおばり、あっという間に輪ができた。

吉武さんら留学生と知り合ったのは、「自己発見」という1年生の必修授業を通じてだった。

自ら問題を見つけ、問題解決をし、解決策を説明できる力を養うことを目指す授業だ。発案した中谷巌学長によれば、「われは何者なのか、何のために生きているのか。すぐには見つからない、でもいつかは見つけたい」と学生に考えさせる内容だ。

今年は東京が抱える問題を探し、解決策を提言することがテーマだった。「郵政、石原慎太郎東京都知事」という題がついた。学生は7～8人ずつの班に分かれる。班ごとに、大学周辺や街を実際に歩いて問題を見つける。47の班が4月から取り組み、7月には提言を発表した。その1班が、吉武さんをリーダーとする8人のグループだった。

4月初めの授業で初対面した。また入学したばかりで、1回目の会合では自己紹介をすることとなった。2回目は「どうする？」の繰り返しで終わってしまった。

具体的な課題が出て走ったのは4月下旬の3回目。みんなの意見は8人様だったが、多数決で「留学生の目から見た東京の問題」に決めた。8月初めには、「テーマを考えようか」という声も出た。

2つのテーマ 東京が抱える問題

国際交流 活性化へ提言

東京都内のいくつかの日本語学校の協力を得て、留学生100人以上にアンケートを実施した。

〈東京の問題は何ですか〉〈東京に住んで嬉しかったことはなんですか〉。抽象的な質問に返ってくるのは〈東京は厳しい〉〈日本人は冷たい〉ばかりだった。これでは問題点は浮かび上がらない。然っぱ。

「これだと思った」と吉武さんらは言う。どうしたら留学生が日本人の友だちをつくれるか――という問題設定にやっとたどり着いた。

それでも、同じ日本語学校に1～2年生と足を運ぶうち、何人かの留学生と仲良くなった。相手から「友だちになれてうれしい」「日本人と友だちになる機会がなかった」という意見が聞けるようになった。

東京にある国際交流関係の43団体に、「どんな交流活動をしているか」などを尋ねるアンケートを送った。しかし、返信はほとんどなかった。市区町村の交流事業についても調べたが、パンフレットを置いているだけの自治体が多かったという。関係団体の活動を調べて、そこから解決策を探ろうとしたが、これは無理だった。

「ひょっとあ後だ」と思った。交流サークルを作ろう、と最後に考えた。日本語学校仲間で、仲良くなった留学生を呼んで、7月に初めての交流会を開いた。留学生はみんなとても楽しそうだった。

自分たちの交流を増やして、多摩国際交流データを制定して交流団体が集まる場をつくることを提案した。留学生向けの日本語のメールマガジンの発行や、外国人向けのパンフレットの充実もあわせて「日本語が話せない」と嘆いた。

ほかの班の発表は、「駅前の活性化」や「商店街の活性化」「身体障害者補助犬の現状」などだった。

授業は発表で終わりだが、毎年、担当教員らが内容のずれた発表を進ち。今年は吉武さんらの班も含めて9班が決まった。11月の大学祭で再度発表し、最優秀を決める。

吉武さんは「視野が広がった気がする。経験しなくてはいけないことがまだまだあるってわかった」と授業の感想を話した。留学生との会合は今後月1～2回の割合で開いていくつもり。

❷多摩川の河原でバーベキューを楽しむ多摩大生と留学生たち＝9月28日、東京都狛江市で
❶オープンキャンパスで問題解決の方法について自分たちの提言を発表する学生＝9月20日、多摩大学で

2・3面 広がる学びの世界
4 面 データに見る学生生活
5 面 うちの名物先生
6・7面 社会人から贈る言葉
9 面 変わる女子大・短大
10・11面 専門学校に学んで

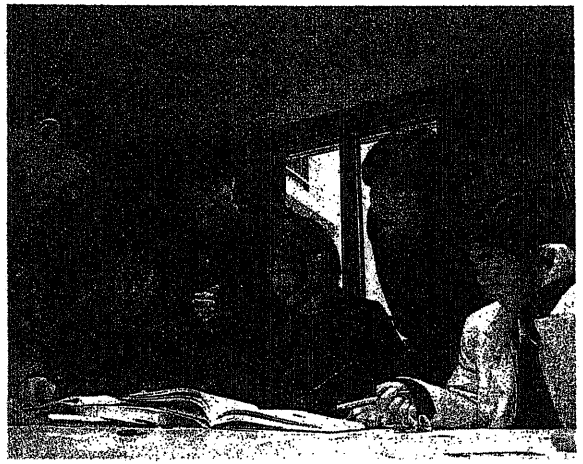
多摩2 13S　2004年(平成16年)4月9日(金曜日)　読売新聞

多摩大でコンテスト

求む！ナンセンス機械

10段階以上の工程を踏んで国旗を描く

簡単にできる作業を、わざと回りくどい工程で実行するナンセンスな機械。そんなアイデアを描き続けたアメリカ人漫画家、ルーベン・ルーシャス・ゴールドバーグ（一八八三―一九七〇年）に学ぼうと、多摩大学（多摩市）の学生らが八月、「ルーブ・ゴールドバーグコンテスト」と題した大会を開く。十段階以上の工程を踏んで国旗を描く機械のアイデアを高校生や大学生から募集し、そのユニークさを競うという大会だ。



大会をどう進めるかを相談する斎藤教授（右から2人目）とゼミの学生たち

発想のユニークさ競う

主催するのは、同大経営情報学部の斎藤裕美教授ゼミの三年生十五人。昨年の授業でコンピューターグラフィックスを勉強した際、参考書に「ルーブ・ゴールドバーグ」という聞いたことのない単語が出てきたのが、きっかけだった。

学生らが調べてみると、アメリカでは、「簡単にできそうなことをするのに用いる非常に手の込んだ機械、計画、仕組み」と辞書にも載る単語で、その名を冠したコンテストが、多くの高校や大学で開かれていることがわかったという。

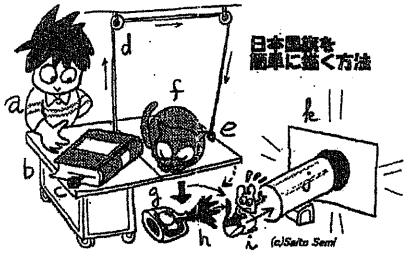
さらに、ゴールドバーグが描いた漫画を探すと、実にユニークなものだった。例えば「陳列窓を清潔にしておく方法」という作品は、①男性がバナナの皮で足を滑らせ②路上にあった熊手の上に転び、その柄が起きあがり③柄に乗っていた蹄鉄が飛び上がって、じょうろがつながったロープにひっかかり……といった工程を経て、最後にモップが動くというもの。

「柔軟な発想がないと出てこないアイデア」と、目を付けた斎藤教授が昨年十一月、それまで同ゼミが毎夏に開いていた「デジタルムービーコンテスト」に代わって、ルーブ・ゴールドバーグのコンテストを開こうともちかけると、学生らも賛同。今年八月二十二日の開催が決まった。

対象は、全国の高校と多摩地域にある大学。教員一人と生徒・学生三人以上でチームを作って参加する。描く国旗はどの国のものでもよい。実際に国旗を描ける機械を作る「マシン部門」、国旗を描く様子を三分以内の実写やアニメなどで表現する「ムービー部門」、実現性とは別にアイデアのユニークさを競う「イラスト部門」の三部門から一つ選ぶ。参加希望者は、今月二十日までに申し込む。

中心メンバーの一人、加賀美夕雲ひさん(21)は「昔の日本人には、無駄を楽しむ余裕があった。効率ばかりが求められる今、こういう無駄なことに取り組み、笑ってもらいたい」と話している。

詳細はホームページ（http://www.edu.tama.ac.jp/rgc/）。問い合わせはコンテスト事務局（☎042・337・7150）へ。



(a)少年が(b)本を持ち上げ(c)しおりをはずすと(d)ひもがゆるみ(e)テーブルがたたまれ(f)寝ていたネコが下に落ち(g)ケチャップをつぶし(h)中のケチャップが飛び出して(i)ネズミにかかり、ネズミは落ちてきたネコに驚いて(j)筒の中に逃げ込み(k)反対側をふさいでいた紙に勢いよくぶつかると日本国旗が描きあがる（斎藤ゼミ作成の参考例）

手作りVRコンテストを勝ち抜いた学生作品が、フランスのVRコンテストで受賞

文・構成　編集部
写真：白井暁彦（東京工業大学）、望月有人（奈良先端科学技術大学院大学）、高田泰生（多摩大学）

VRコンベンションLaval Virtualレポート

5月11～16日、フランス・ラバル市でバーチャルリアリティコンベンションLaval Virtual（主催、ラバル・マイエンヌ・テクノポル研究所）が開催された。同大会は、製品や技術の見本市や、バーチャルリアリティ（VR）技術に関する研究・学習の機会を提供するワークショップ、企業・大学を問わず、優秀な製品・作品・技術に対して賞を授賞するコンテストから構成。同時に、IEEE-VRIC（電気電子技術者協会バーチャルリアリティ分科会）フランス支部の研究会も開かれた(http://www. laval-virtual.org/)。

日本からは、学生・企業が出展するコンテストに、昨年度の第11回学生対抗バーチャルリアリティコンテスト（IVRC2003）でLaval賞を受賞した学生2チームが出場。奈良先端科学技術大学院大学の「和田おろし」チームのフレグラが、見事ビデオ・ゲーム＆アトラクション部門でトロフィを獲得。そのほかにも、日本から参加した研究者たちの作品・技術は高い評価を受けたという（写真1）。

同大会参加者たちの声をもとに、同大会の様子をレポートする。

「匂い」とタンスというユニークなユーザー・インタフェースの2作品が日本から参戦

昨年9月、岐阜県各務原市テクノプラザでIVRC2003（主催：IVRC実行委員会、実行委員長：東京大学舘暲教授）が開かれた（本誌Vol.31参照）。同コンテストは学生による手作りVR技術を競う場として10年以上に渡って開催されてきたもの。第11回を数えた昨年から、ラバル市開催のVRコンベンションLaval Virtual参加資格を与えるLaval賞という新しい賞が創設。第1回Laval賞を受賞したのは、奈良先端科学技術大学院大学の「和田おろし」のフレグラと、多摩大学の「Tasmania」のDis-Tansu。フレグラは同コンテスト総合優勝にも輝いた。

フレグラは、匂いといういままでVR技術では取り上げられてこなかった感覚を活用するゲーム的作品。同作品を体験しようとする人は、ヘッドマウンテッドディスプレイ（HMD）と、匂いを提示する専用デバイスを右腕に装着（写真2）。HMDと匂いデバイスには位置センサがとりつけられ、映像が頭や右手の位置に連動して動く。

ゲームが開始されると、画面にりんごやパンなどの物体が表示されるので、右手でそれらをつかみ、鼻の前まで持ってきてその匂いをかぐ。そうすると、匂いデバイスから匂いが漂ってくるので、つかんだ物と漂ってくる匂いが一致するか判定する。判定の正確さによって、体験者の「鼻の利き具合」がランク付けされる。匂いの元の香料は8種類用意され、それぞれ別のチューブから圧縮空気で押し出される。フランス語版のゲーム画面を用意し、子供たちにも人気であった。

奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科修士2年の望月有人さんは、「IVRCの段階では、匂いの出る部分をHMDに付属させていたためかなり重量があった。しかし、今回それを腕に装着することで、デバイスの軽量化、装置の着脱容易化を図った。また、匂いを生成する部分も小型化し腕に装着して匂いの再現性向上も図った」と、Laval Virtual参加に当たっての改良を説明する（写真3）。

一方、Dis-Tansuはタンスの引き出しを開けると、その中に3D画像の世界が広がるという、ちょっと不思議な作品。昨年のIVRCでは、がたがたと引き出しを揺すると、中の3D画像のプールに波が立ったり、ばらばらの化石の骨が動き出して恐竜の形に組みあがったりするという作品が展示されたが、今回は日本庭園をモチーフにコンテンツを全面的に作り変えたという（写真4）。「もっと作りこみたいが、その場しのぎだったIVRCのものに比べ完成度は相当上がっていると思う。また作品の外観とフィードバックを若干改良した」と、多摩大学経営情報学部経営情報学科4年の高田泰生さんは説明する。

しかし、「(Dis-Tansuの）展示はトラブルの連続。装置を2台持参したが、片方のPCが起動せず1台で展示することになった。2日目のStudent Competitionは無事に乗り切ったものの、Awardの審査があった3日目に停電があり、それによってトラブルが発生し、審査を受けられなかった。トラブルに備えた対策を採ってこなかったことが反省される」と高田さんはいう。だが、海外発表のよい経験ができたようだ。

熱気にあふれるLaval Virtual、デバイスの工夫で際立った日本のVR技術

Laval Virtualはものすごい熱気だったと参加者は声をそろえていう（写真5）。

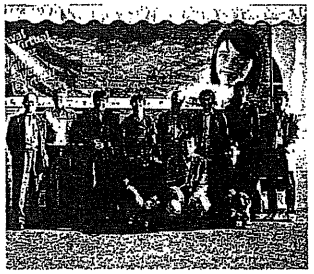


写真1　Laval Virtual会場前で、「和田おろし」（後列中央、及び右）と「Tasmania」（多摩大学出原研究室）のみなさん（前列）と、東工大佐藤誠教授（後列左端）、ラバル・マイエンヌ・テクノポルのジャン・フランソワ・フォンテーヌ所長（後列中央）、国立情報学研究所のフレデリック・アンド

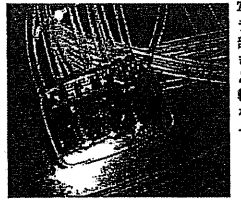


写真2　フレグラの匂い提示部。腕に装着できるようにしたことから、装置の軽量化・小型化などが可能になった。

写真3，フレグラを体験している見学者。右手にデータグローブと匂い提示部をつけ、画面中の物体を右手でつかんで鼻の辺りにもって

写真4　「Tasmania」のDis-Tansu。タンスを開けると、日本庭園をイメージした3D画面が広がる。

写真5　Laval Virtual学生コンテストの審査会場。作品から制作者の真剣さがうかがわれる。

朝日新聞 第3種郵便物認可

昨夏の影響 関戸橋花火中止

大学生 復活を陳情

街の声聴き研究 多摩市議会委 継続審査に

昨年夏、川の増水で花火師が中州に取り残される騒ぎがあった多摩川関戸橋花火大会。今年は主催者の多摩商工会議所の判断で中止されることになった。これに対し「地域のイベントの灯を消さないで」と地元の多摩大学の学生有志が復活を求め、265人分の署名とともに多摩市議会に陳情をした。陳情は継続審査に。学生らは「地域の活性化の点からじっくり議論を」と期待している。

花火大会は昨年まで18回を数え、例年10万人近い見物客でにぎわう。だが昨年8月、大雨で多摩川が増水し、打ち上げ場所の中州に花火師ら34人が取り残され、救助される騒ぎがあった。

主催する同商議所は今年4月、今年度の花火大会を中止する決定を下した。商議所の役員の一人は「昨年の騒動や厳しい経済状況を考慮して、この夏の実施は難しいと判断した」と言う。

多摩大学1年生の小山貴史さん(18)は、5月に市のホームページで中止を知った。「毎年、夏の楽しみにしていたのに」と驚いた。自分たちで問題を見つけて解決策を考え、発表する大学の必修授業「自己発見」のテーマに、花火大会を選ぶことを提案した。

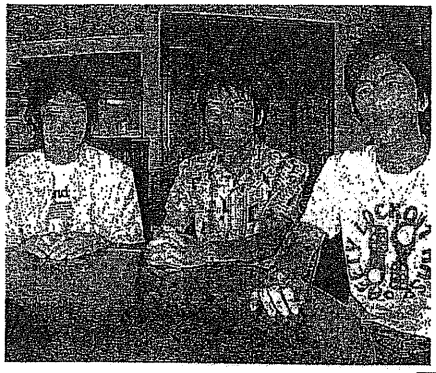
研究グループ9人で手分けし、商店街や市役所などで話を聞くうち、市の財政難で補助金が削減されていることや、「経営が苦しく(花火の)協賛金が重荷」と言う業者もいることがわかった。

それでも、市民の間では花火の復活を望む意見が強かった。

「花火大会が街づくりに果たしてきた役割は大きい」と、地域の声を生かすことを考えた。調査を通じて知り合った市議のアドバイスに従って、市議会に陳情を出すことにした。

陳情を審議した常任委員会は「他市の例などをさらに調べる必要がある」と継続審査にした。委員の一人は「地域の施策に積極的に提言したいという学生の心意気は買いたい」。

小山さんは「街の人々の助けも借り、自己満足の活動に終わらず陳情の形にできた。議会の議論に注目したい」と話している。



関戸橋花火大会について陳情を出した小山貴史さん(左)ら多摩大学の学生=多摩市で

MARCH 2004

全国高校生対象／多摩地域大学生対象 ルーブ・ゴールドバーグコンテスト開催

ルーブ・ゴールドバーグ（1883―1970）はもともと漫画家で、例えば「歯磨きを歯ブラシの上に載せる」という「簡単な」作業を、「矢が飛んでバネがはずれて滑車が回って…」といった何十工程を経て行うマシンを描いて、機械文明主義をからかっていました。今日では辞書にも掲載されています。

多摩大学齋藤ゼミは、ルーブ・ゴールドバーグ社の許可を得て、日本初の「ルーブ・ゴールドバーグコンテスト」を実施します。第1回のテーマは「10段階以上の過程を経て国旗を描こう！」です。マシン、ムービー、イラストのいずれかで応募してください。エントリーは4月20日(火）まで。本番は8月22日(日）です。詳細はホームページをご覧ください。

URL: http://www.edu.tama.ac.jp/rgc/

2004 SEPTEMBER

ルーブ・ゴールドバーグコンテスト結果発表

2004年8月22日(日)に多摩大学で齋藤ゼミ主催ルーブ・ゴールドバーグコンテストが開催されました。 2004年の課題は「10段階以上の課程を経て国旗を描こう！」です。審査の結果、マシン部門グランプリにはものつくり大学「からくり新撰組」チーム、ムービー部門ビジュアル賞には青葉短期大学「きんぎょ」チーム、イラスト部門イラスト賞には多摩大目黒高校「2年A組谷川学級」「C-u.Li.A.M.Princess」チームが選ばれました。

グランプリを獲得したからくり新撰組チームの作品

第932号
9/18
発行 野田市内 45,000部 (毎週土曜朝刊折込)
発行所 のだジャーナル社
TEL 7125−2102 (木曜定休)
〒278-0037 野田市野田766-24ヨシダハイツ105

3大学コラボレーション 野田のまちづくり

シンポジウムとプレゼンテーション

今までに例をみない3大学の教授と学生が共同で実施するまちづくり企画が、野田のまちを対象として行われる。

野田のまちの可能性に注目していた多摩大学の望月照彦教授のアイデアで、多摩大学・実践女子大学・常磐大学の教授とそのゼミの学生による画期的なシンポジウムとプレゼンテーションが25・26の両日、野田商工会議所大会議室で開かれるもの。

25日はシンポジウム「変わる社会、変わる価値」、26日はプレゼンテーション「観光交流都市の創造」。両日とも午後1時30分から。

この企画を市民グループ「野田の食と観光を応援する『まちづくり協議会・食と観光部会』では、多くの市民のみなさまの参加をお待ちしていますと話している。

詳しくは野田商工会議所☎7122・3585まちづくり協議会・食と観光部会まで。

彼岸花 中央の杜を散歩する読者が「花のないこの時期がさみしい」と1カ月程前に球根を植えた。朱も鮮やかさを増す。

模擬店は「株式会社」

多摩大・野田ゼミ 大学祭出店

2000円出資、配当も

大学祭の季節。多摩大（多摩市）経営情報学部の野田稔助教授のゼミは、学生が2千円ずつ出資する株式会社形式の模擬店を6、7両日の「雲雀祭」に出店する。毎年マーケティング、組織論、統計学などの理論を駆使して売り上げ増を目指しているが、思わぬ失敗も。それはそれで、ビジネスの仕組みを学ぶ貴重な機会になるという。

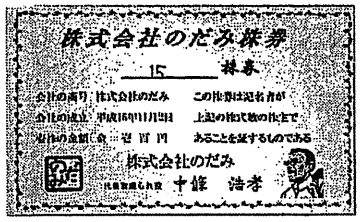
多摩大学の教室内で2日夕方、模擬店に向けての試食会と価格決定会議が開かれた。テーブルに並んだ商品は韓国料理の「チヂミ」と北海道名物の「イモモチ」。もちろんゼミ生の手作りだ。

2、3年生約40人が、「冷めるとイマイチ」「タレをもっと多く」など品評しながら試食。その後、価格について話し合った。

模擬店で扱う商品を試食する多摩大野田ゼミの学生＝多摩市内で

ゼミ生は、貸借対照表、一個当たりの原価、価格と売上数の変化に応じた利益の差、予想入場者数、過去30年分の気象データなど、各自分担して調べた資料とにらめっこ。「200円」「いや、お祭りで気前が良くなるから250円」。議論は白熱した。

この日は額面200円の株式も発行され、3年生は一人2千円分を出資した。配当は売り上げ次第なので、みな真剣だ。



野田ゼミ発行の株式

野田ゼミの模擬店は、日ごろ学ぶ経営論、組織論を実践する場として、4年前の大学祭から始まった。

焼きそばなどの定番メニューは避け、ほかの参加団体の出品情報を探りながら、6月ごろから商品を選定しコンセプトを練る。大学祭後は株主総会で決算報告もする。

利益20万円以上の大成功もあったが、予想外の出来事も続出した。「揚げリンゴ」を出した4年前は、販売部門と製造部門の連携が悪く、皮をむいた原料のリンゴが大量に余った。昨年に出したスープは、ぽかぽか陽気でさっぱり売れなかった。

「昨年は需要と供給のバランスが取れていなかった。組織が目的を持って行動し、機能することは本当に難しい」と、ゼミ長の的場達也さん(21)は反省する。

今回は、利益の2割を新潟中越地震の被災地に寄付する予定だ。

雲雀祭は6日は午前10時から午後8時まで、7日は午前10時半から午後8時まで開かれる。

2005 JANUARY

齋藤ゼミ神崎伸義君 ホームページグランプリで受賞

「学術・文化・産業ネットワーク多摩」が主催した「学生がつくる!! 中小企業ホームページグランプリ」に多摩・武蔵野地域の20大学85人の学生が参加し、齋藤ゼミの神崎伸義君(4年生)がプラスチックレンズメーカー「マイルストーン」のホームページを制作して見事グランプリを受賞しました。2004年12月7日(火)には多摩中央信用金庫本店で授賞式が行われました。多摩大学からは他に2チーム4名が参加しそれぞれ企業賞を受賞しました。

神崎君は2004年7月頃から府中市にあるマイルストーン社を数回にわたって訪問。担当の綿貫拓也さんに取材し、意見を聞きながら企業紹介のホームページを2ヶ月間で制作しました。齋藤ゼミで3DCGの研究をしている神崎君は「実際に大学の研究でやっているデザインと違ってクライアントの要望と見てくれるユーザの視点に立ったホームページ制作を行いました。このような機会は大学内だけでは体験することはできないのでとても貴重な体験でした。」と語りました。

授賞式にはマイルストーン社の綿貫拓也さんも出席し、「はじめてこのホームページを見させてもらった時は社員みんなすばらしいと思いました。少人数の会社で神崎君のような大学生と接することができて私たちもいい刺激になりました。」と授賞の挨拶をしました。神崎君は今後もマイルストーン社のホームページ制作にかかわり、卒業後もグラフィックデザインの勉強を続けていくということです。授賞したホームページは多摩中央信用金庫ホームページで見ることができます。

http://www.tamahp-gp.jp/result/43/01/index.htm

授賞した神崎君(右)とマイルストーン綿貫拓也さん(左)

出原ゼミヨーロッパ最大のCGの祭典 "IMAGINA(イマジナ)"に出展

出原ゼミ(出原至道助教授)がモナコで開催される"IMAGINA(イマジナ) 2005"に作品「Dis-Tansu」を出展しました。IMAGINA 2005は世界中のクリエーター、アーティスト、映像プロデューサーの様々な作品が出展されるヨーロッパ最大のCGの祭典です。

出原ゼミのDis-Tansuは2003年に岐阜で開催されたIVRC(International Virtual Reality Contest)で全国２位を授賞。その後フランスで開催されたLabal Virtual 2004、アメリカで開催されたSIGGRAPH 2004に招待され、出展するなど世界から高く評価されています。

今回の出展もシーグラフに出展していたDis-Tansuを実際に見たイマジナ関係者の目にとまり、特別に学生４名が招待されたものです。2月2日から5日の間学生４名と出原助教授がモナコに行き、Dis-Tansuの展示・説明を行いました。

Dis-Tansuはタンスの中にディスプレイと加速センサを設置して、引き出しを前後に揺らすことにより水に波が立つなど、インタラクティブ性を重視した作品です。様々なコンテンツを表示させることが可能で引き出しを引くと立体的に表示された恐竜の化石や波打つ水を配置したりできます。最新のコンテンツは「日本の四季」。引き出しを開くとそこには日本の庭園が広がって、春には桜、冬には雪が舞っています。引き出しを開け閉めすることにより庭の池の水が波立つだけでなく、風が起こり桜や雪が吹雪になる。そんな幻想的な作品もあります。

出原ゼミでは1998年に「Genshi」、1999年に「t-oro-brabo」、2000年に「トブオンプ」、2001年に「ゆうたいりだつ」、2002年に「MAHO-PEN～必修2単位」と毎年IVRC全国大会に出場しています。

出原ゼミホームページ:http://iis.edu.tama.ac.jp/

Dis-Tansuについて説明する出原助教授

2005 MARCH

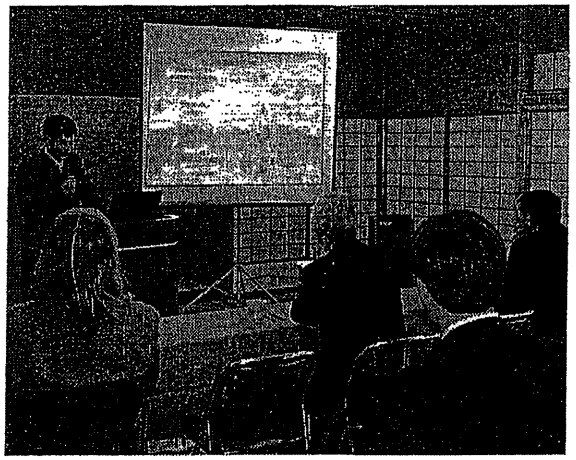
集成館事業 経営学で検証

多摩大生6人 仙巌園で研究発表

幕末の集成館事業を経営学の視点から検証している多摩大学（東京）の学生たちが十三日、鹿児島市吉野町の仙巌園で研究発表会を行った。日本の近代化が薩摩藩から始まった理由や、事業成功に導いた島津斉彬の資質などが論議された。

磯地区の住民や県内研究者約三十人が集まり、学生六人が報告した。技術者らをイノベーション（変革）へ奮いたたせた斉彬の運営能力などを分析。薩摩藩の工業製品のブランド力に着目した同大大学院経営情報学科二年の佐野博昭さん(三)は「斉彬の就任と施策は、〝夢〟や〝驚き〟の創造で藩内外への口コミ効果や海外の評価を呼び、薩摩ブランドの価値をより高めた」と評価した。

同大では二〇〇四年、望月照彦大学院教授（地域経営）を中心にした研究グループがつくられ、人間研究とプロジェクトマネジメントの側面から集成館事業を学び、二十一世紀のビジネスモデルに応用する試みを進めている。



集成館事業について研究発表する多摩大の学生

『毎日新聞』朝刊 2005年6月15日 毎日新聞社発行

映画『耳をすませば』で町おこし

"舞台"の新興住宅地

京王線 聖蹟桜ケ丘駅周辺

商店主、大学生ら

来月から ラリー、上映会など

アニメ界の名監督、宮崎駿氏がプロデュースした映画『耳をすませば』(95年7月15日公開)が封切りされて間もなく10年になるのを機に、映画の舞台とされた多摩市北部の京王線聖蹟桜ケ丘駅周辺の商店主や多摩大学の学生らが『耳をすませば』の町おこし」に乗り出した。7月から「モデル地探訪ラリー」や無料上映会などを行う。【工藤哲】

「耳をすませば」は、柊あおいさんの漫画作品を、宮崎氏の片腕として知られた近藤喜文氏(98年死去)が監督を務めてアニメ化した。読書好きの女子中学生、月島雫(声・本名陽子)と、バイオリン職人の修業を決意する同学年の天沢聖司(同・高橋一生)の心の交流を描く。

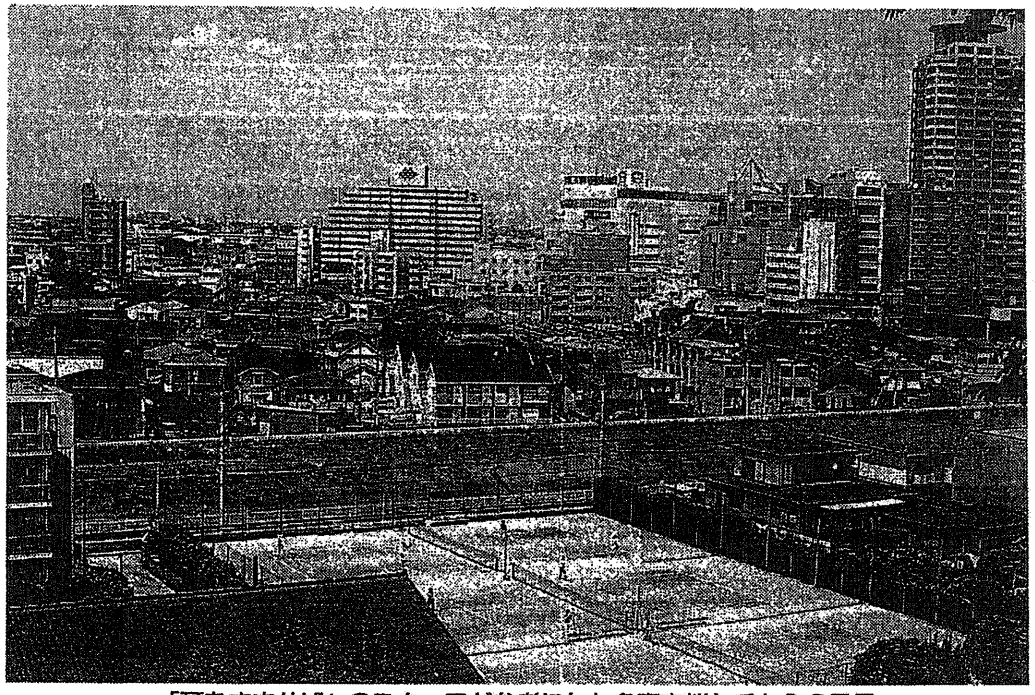
制作を手がけたスタジオジブリ広報部(小金井市)によると、舞台の新興住宅地は聖蹟桜ケ丘駅周辺と近隣の多摩ニュータウンを参考にした。作品では、実際にある坂や丘にそっくりの風景が出てくる。

公開後は『耳をすませば』のモデル地」として、熱烈な宮崎ファンが全国から訪れ、記念撮影スポットができるなど人気を集めていた。作品にあこがれて多摩市の多摩大学に入学した経営情報学部3年の鴨川美紀さん(22)らが今年2月に上映会開催を地元商店会に持ちかけたのを機に、「耳をすませば」を生かした町づくり計画が浮上した。

「モデル地探訪ラリー」(先着1000人)は7月10日午前10時に同駅西口交番前をスタートし、いろは坂や街が一望できる公園など6地点(約2キロ)をたどる。同17日は多摩大学の学生らを中心にしたロケ地ツアーや永山、関戸両公民館、多摩中学校での無料上映会などを開く。12月4日午後2時には関戸公民館で主題歌「カントリー・ロード」を歌った本名さんを招くコンサートも。

鴨川さんは「『耳をすませば』を生んだ聖蹟桜ケ丘の魅力を見直す機会にしたい」と話す。地元の中央商店会会長、森田利夫さん(63)も「今回のイベントを機に若い人が集まる町にしたい」と期待する。

問い合わせはラリーとコンサートは森田さん(042・373・5869)、上映会などは同大非常勤講師の大川新人さん(電話とファクス042・339・4530)へ。



「耳をすませば」のスタッフが参考にした多摩市桜ケ丘からの風景

自己発見の成果
せいせき多摩川花火大会復活!!

2005年8月10日(水)、2年ぶりに多摩川関戸橋の花火大会が復活する。この花火大会は多摩大学の最寄り駅である聖蹟桜ヶ丘駅近くの多摩川河川敷で毎年行われていた花火大会で多摩市の夏の風物詩となっていた。2003年8月に大雨による増水で花火師が中洲に取り残される事故が発生し、2年間中止となっていた。「せいせき多摩川花火大会」の運営実行委員会に多摩大生２人が参加している。

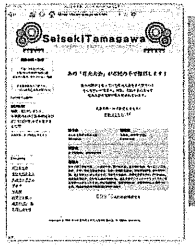
一人は鈴木隆久君(２年)。きっかけは2004年の自己発見。この年の自己発見フィールドワークのテーマは「多摩の問題を発見し、解決せよ」。当時１年生だった鈴木君は最終発表会のテーマに「花火大会復活による多摩市活性化」を選んだ。多摩市を活性化させるためには花火大会を市民の手によって復活させたい。その思いから地元商店街にかけあい、アンケート等を実施し、話を進める。しかし、その年は残念ながら復活させることはできなかった。自己発見授業が終了した後も鈴木君は聖蹟桜ヶ丘商店街の人たちと、街の活性化については議論を重ねた。

多摩市が花火大会の補助金として1千万円を計上したことで、4月に大会の実行委員会が発足。鈴木君は委員に加わり広報全般を担当している。ホームページの運営にはもう一人の多摩大生、丹野陽子さん(３年)が担当している。ホームページの更新はすべて一人で行っている。

花火大会にかける意気込みを鈴木君はこう語った。「このプロジェクトに参加する前から多摩大学の地元商店街として聖蹟桜ヶ丘はよく利用していました。プロジェクトに参加後も商店街の人たちや街の人たちの声を聞いているととても暖かい人たちばかりでした。その恩返しがしたいという気持ちもあります。また、街作りに直接参加できることも大変勉強になります。安全面や資金面でまだまだ大変な部分もありますが、やりがいはすごく感じています。」

自己発見がスタートして今年で４年目。問題を発見し、解決することによって得ることのできる「気づき」。この「気づき」を得た多摩大生がさまざまな方面で活躍し始めている。

せいせき多摩川花火大会ホームページ:http://hanabi.tama.jp/



丹野さんが作成しているホームページ(左)
実行委員会で多忙な日々を過ごす鈴木君(右)

2005 JULY

多摩 13版 2005年(平成17年)7月9日 土曜日 朝日新聞

モデルの多摩で街おこしの試み

多摩大生や商店会

アニメ「耳をすませば」

無料上映や背景画展

宮崎駿さんが脚本などを手がけ、多摩市が舞台のモデルとなったアニメ映画「耳をすませば」の上映10周年を記念して、多摩大学（多摩市聖ケ丘）の学生が地元商店会と連携して17日に無料上映会を開く。作品には、随所に多摩市そっくりの風景が出てくることから映画の背景画展も企画、「多くの人に街の良さを再発見してもらい、街おこしにつなげたい」という。

「耳をすませば」は、ニュータウンの団地に住む中学3年生の月島雫が、バイオリン職人を目指す同級生の天沢聖司との初恋を通して、自分の可能性を見つけ出そうと努力する姿を描く。

映画には多摩市の聖蹟桜ケ丘駅周辺にそっくりの情景があちこちに登場する。

上映10周年記念イベントは、多摩大の大川新人講師の授業「映画で街おこし」を履修する学生23人が企画している。

昨年暮れ、「耳をすませば」のファンという鴨川美紀さん（3年）が、大川さんに上映会の開催を持ちかけたのがきっかけ。「街おこしと結びつければ面白い」と、4月から始まった期間限定のプロジェクトゼミのテーマに採り入れた。

学生らは5月に物語のモデルとなった聖蹟桜ケ丘周辺を歩き、神社やロータリー、見晴らし台など似通った風景をチェックした。多摩市職員や地域のNPO関係者からも話を聞き、多摩ニュータウンの成り立ちや街づくりについて学んだ。

地元の桜ケ丘商店会連合会ともタイアップ。約30万円の協賛金が集まり、学生らも商店会のイベントを手伝ったりして交流を深めた。

「すてきな風景とか町並みとか、ニュータウンにも宝物がある。多くの人々に来てもらって商店街もにぎやかになればいい」と鴨川さんは話す。

「耳をすませば」上映会は17日、午前9時半から永山公民館ペルプホール、午後1時15分から多摩中学校体育館、同6時45分から関戸公民館ヴィータホールで。また、アニメの背景画展示会は15～18日、関戸公民館ギャラリーで開かれる。

いずれも入場無料。問い合わせは大川さん（042・339・4530）へ。

アニメ映画「耳をすませば」にそっくりの情景が登場する金比羅宮＝多摩市桜ケ丘で

『毎日新聞』朝刊 2005年7月15日 毎日新聞社発行

多摩ニュータウンの活動取材

住民の歩んだ歴史 生の声で

多摩大生らHP開設

多摩ニュータウンにかかわって暮らす人たちの経験の豊かさや足跡を記録しようと、多摩大学の2～4年生約100人が15日、多摩市のNPO(非営利組織)と協力してホームページ（HP）「多摩ニュータウン・ヒューマンマップ・プロジェクト」を開設する。企画した同大総合研究所は「普通の市民の姿を紹介してニュータウンの経験を共有し、外にも魅力を発信したい」と意気込み、更新し続ける考えだ。

元多摩市職員の小谷田進さん（右端）にニュータウン開発初期の様子を取材する学生ら＝八王子市で

HPでは、ニュータウンに長く住み、市民活動などをしている30人を紹介。同大で「地域社会とビジネス」の授業を受ける学生が「多摩ニュータウンの歴史と今」をテーマに取材してきた声を載せる。

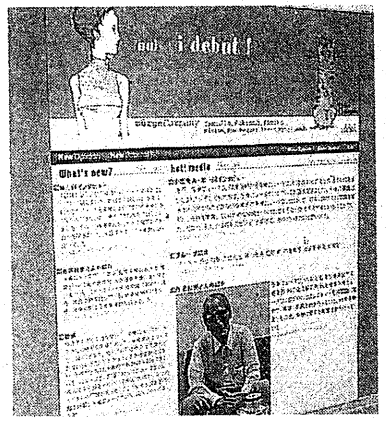
人選は、同市の永山名店会でお年寄りの交流拠点作りをしているNPO法人・福祉亭が協力し、学生の希望を聞いて関係者に取材協力を求めた。創刊36年の歴史がある地元紙「多摩ニュータウンタイムズ」発行者の横倉舜三さん(82)や、下半身の障害を抱えながら障害者の就労支援のボランティアをしている田中三郎さん(68)らが5、6月に数人ごとの学生グループの取材に応じた。

学生たちは、初期のニュータウンと今の姿、当時と変わった点を中心に取材。何度も通い、その人の今の活動やニュータウンへの思いをまとめた。取材した2年生の鮎沢勇樹さん(21)は「資料に頼らず、思い出を語る生の声をできるだけHPに盛り込んだ」と話す。

HP編集を手がけた多摩大総合研究所の松本祐一助教授(33)は「ニュータウンには経験豊かな人材がいるが、生の声の記録は少ない。取材を通じて、学生には相手から生き方を学び、さまざまな人生を発掘してほしい。後期からは1人暮らしのお年寄りも取り上げたい」と話す。

HPはhttp://www.atpass.co.jp/tama/

【工藤哲】



多摩ニュータウンにゆかりの深い30人の生の声を紹介したホームページ

朝日新聞 第3種郵便物認可

観光スポットを多摩大生ら見学

第3回「栃木元気塾」

栃木市と近郊地域を活性化するための勉強会「栃木元気塾」（栃木元気プロジェクト推進委員会主催、栃木市、朝日新聞宇都宮総局共催）の第3回講義が28日、栃木市で始まった。

第2回元気塾で講演した多摩大学の望月照彦教授の「ゼミ合宿」として学生約50人が参加。29日までの2日間の日程で開かれ、蔵などの活用方法を学生らに提案してもらう。

28日は、学生たちが6班に分かれ、観光ボランティアの案内で市の観光スポットや巴波川、蔵、市役所別館などを見て歩いた＝写真。巴波川周辺や空き蔵などを中心に視察した3年生の中野明さん(21)は「歴史を感じさせる街だ。観光客の立場で考えたい」と話した。

29日には、班ごとに提案を出す。市場力や経営力、表現力などの面から評価して優秀な提案を表彰する。

ゼミ中心大学
EXゼミで新たな知のネットワーク！！

多摩大学は2005年度より「ゼミ中心大学」をより推進するために新しいゼミ形式「EXゼミナール」をスタートさせた。これは中谷巌学長が就任以来提唱する“オープンナレッジ・ユニバーシティ”を具現化したゼミ形式である。オープンナレッジとは「優れた知識や深い知恵は大学だけにあるのではなく、広く社会に分散しており、世紀の大学の役割は、そういった社会に分散している知識や知恵をネットワークし、相互に知識を創発する場を創ることにある」という考えである。多摩大学の専任教員だけでなくそれぞれの分野の最先端の研究者やビジネスパーソンにもゼミの担当をお願いし、最先端の知のネットワークを構築する。

2005年7月末で春学期のEXゼミが終了した。通年で行っているゼミもあるが、半期ながら具体的な成果のあがったゼミも少なくない。

大川新人EXゼミ「映画でまちおこし」では、多摩大学最寄り駅の聖蹟桜ヶ丘駅商店街及び街の活性化を、ジブリ映画「耳をすませば」で行うという画期的な試みを行った。ゼミ生が企画、運営を行い、商店街そしてジブリと話し合い「耳をすませば」の上映会と舞台となった聖蹟桜ヶ丘をスタンプラリーでまわるイベントを開催した。近隣住民だけでなく日本中の「耳をすませば」ファンが集まる熱気あふれるイベントとなり、新聞各紙に取り上げられるなど、多方面から注目を浴びた。

田中雄EXゼミ「携帯アプリの開発」では、実際に携帯電話のアプリケーションを開発した。田中先生は現役のプログラマーでAUやi-Modeの携帯アプリケーションの開発業務を行っている。半期という短い時間だったため授業で作成したのはスライドショーアプリケーションだったが、継続してロールプレイングゲームを作成したいと語る学生もでてきたという。

佐野裕美子EXゼミ「児童英語教育」では、実際に多摩大学近くの聖ヶ丘小学校に行ってゼミ生が英語の授業を行った。3、4年生の各クラスにゼミ生が行ってゲームや簡単な英語のレッスンを行った。このゼミの活動をきっかけに多摩大学と小学校の交流が深まり、実際に小学生が多摩大学を見学に来るようになった。

この他にも様々なEXゼミが開講され、次々に新しい試みが行われている。秋学期にも新たなEXゼミが開講され、ますます「ゼミ中心大学」多摩大学の活動が活発となるだろう。

田中雄EXゼミ「携帯アプリの開発」の様子

佐野裕美子EXゼミ「児童英語教育」の様子(聖ヶ丘小学校)

小学校でボランティア活動
近隣地域の小学校との交流深まる

ボランティアサークル「てつたま」が多摩大学近くの聖ヶ丘小学校で授業サポートのボランティア活動を行っている。メンバーは14人。

この活動を始めたきっかけをサークル代表の竹内圭さん(3年生)はこう語る。「大学生は小学生から見たら大人。でも気付いていない大学生も多い。小学校に行くことによって自らを見つめ直せるし、小学生に接することで学ぶことは多いです。」

7月11日(月)宇野淳美さん(3年生)は小学校1年生のクラスの音楽の授業のサポートを担当。夏休み前の最後の授業だ。鍵盤ハーモニカや合唱を子供の目線でサポートする。「小さな子に教えることに以前から興味がありました。でも低学年は教えるのが大変ですね」と活動について語った。

佐野裕美子先生のEXゼミやスクールインターンなど地域の小学校との交流が深まっている。

小学1年生に丁寧に教える宇野さん

2005 AUGUST

2005 OCTOBER

望月照彦ゼミ“小江戸”活性化を提案

望月照彦ゼミが栃木県栃木市の近隣地域を活性化する提案を行い、多方面から注目を集めている。

きっかけは栃木を活力のある街にするための勉強会“第2回栃木元気塾”で望月照彦教授が「景観を生かし発信を」と提案したこと。“第3回栃木元気塾”には7月28日(木)・29日(金)の日程でゼミ合宿として2年生から4年生のゼミ生が参加した。6チームに分かれ、地元の観光ボランティアの案内で白壁土蔵や歴史的な建物、市の中心部を流れる巴波川など市の観光スポットを見てまわった。栃木市は“小江戸”と称されるほど情緒ある風景を残した町である。ゼミ生達はフィールドワークや親睦会で実際に地元の方と接して集めた情報や写真・資料をもとに徹夜で活性化の為の提案をまとめあげた。

2日目は発表を行い、高校生と地元住民との接点を作って町の活性化を図る提案や、情緒あふれる風景にマッチする屋台をプロデュースしてイベントを開催する案など様々な提案が発表されました。その中で優秀提案に選ばれたのが「Ne蔵」と題して使わなくなった蔵を改修し観光資源として再利用するという提案だった。

齋藤貴子さん(3年生)は今回のゼミ合宿について「2年生にステップアップするチャンスをつくろうと今回のプレゼンは、すべて2年生が行いました。大きなプレゼンは初めてだったので、栃木市の方に見苦しい点をみせてしまうのではないかと不安はありました。ですが、予想以上に頑張ってくれたので良いプレゼンになりました。」と語った。

望月ゼミの提案は当日参加していた市議会議員の共感を呼び実際に市議会に資料が提出され、今後実現されることもあるかもしれないという。形ある提案活動を行う望月ゼミの活動に今後も注目したい。

栃木市の歴史と文化を味噌蔵の主人からヒアリング

多摩ニュータウンタイムズ
THE TAMA NEW TOWN TIMES
776号 毎月1日・15日発行 http://www.tamatimes.co.jp

11月1日（火曜日）
平成17年（2005年）

発行所
多摩ニュータウンタイムズ社
〒206-0034多摩市聖蹟桜ヶ丘1-23朝日生命ビル2F
TEL 042(374)8588
FAX 042(374)8599
E-mail tamatime@news.email.ne.jp
発行部数 105,000部(多摩ニュータウン全域)
購読料 1年間3,150円(郵送料込)

せいせき街おこし

中央商店会企画・主催

第一回 ハートフルコンサート

地域の活性化を願い、聖蹟桜ヶ丘の中央商店会では、12月4日に第1回「ハートフルコンサート」を主催する。

多摩市では、商店街が一致して活性化に取り組む事例は少ない。このため、今回の試みは街おこしに欠かせない商店街が結集したものとして注目される。市は「新元気出せ商店会補助金対策事業」に該当するものとして53万円の補助金を計上した。チケット申込は先月末に受付を終了しているが、この試みが成功するかどうかは、今後一つの試金石となるだろう。

もともと、聖蹟桜ヶ丘駅周辺は、以前宮崎駿さんが手がけたアニメ映画「耳をすませば」の舞台のモデル地となった。「この映画がせいせきの街おこしにつながらないものか」と、今年2月、多摩大学・大川ゼミの学生数人が桜ヶ丘の商店主などに同映画の上映会開催を持ちかけ、これを機に、無料上映会やアニメの背景画展示会、モデル地探訪スタンプラリーなど「耳をすませば」を生かした街おこしが進められてきた。

こうした実績を踏まえ、「耳をすませば」上映10周年を記念し、中央商店会（会長森田利夫）では、アニメ主題歌「カントリー・ロード」を歌った本名陽子さん他を迎え、コンサートを開催することになった。

商店会では、こうして継続的にイベントを行うことにより、「せいせき」を食事や買い物に行く場所から、より魅力的な街にしていきたいとしている。この街おこしが大きなうねりとなっていくことを願う。（森田）

◇日時 12月4日(日)14時～・18時～
◇出演 本名陽子／カル★ム◇会場 関戸公民館ウィータホール
◇問い合せ ☎042(373)5869中央商店会

～耳をすませば～

アニメ主題歌「カントリー・ロード」を歌った本名陽子さん

多摩を中心に活躍中のカル★ム